

子どもと水

草信 和世

車の多い道路に囲まれて、鉄筋コンクリートの高層住宅に住む子どもたちにとって、幼稚園はひとつの「オアシス」なのかもしれない。

今日は、入園をひかえた子どもたちが、おかあさんといっしょに幼稚園へ遊びに来る「一日入園」の日。私たちがスタッフは、園庭にシャベルをさしたり、「木の汽車」を並べたり、おわんやスプーンいっぱい用意したりして、彼らを待つ。さて、どんな風に遊び始めるかな。

かわいい真っ白のブラウスやスカートを着た子どもた

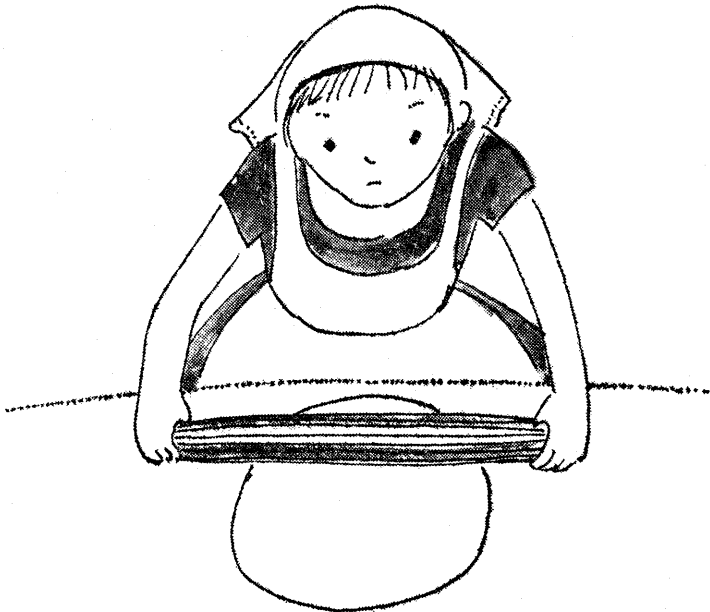
ちが、おかあさんの手にひかれ、三々五々集まってくる。期待と不安の入り混じった顔で、遠くからじっと私たちの様子をうかがっている子、もう帰りたくなってしまう子、幼稚園が珍しくて、キョロキョロしている子、表情は様々だ。

最初、私たちが「あそぼう。」と誘ってもなかなか入ってこない彼らだが、大人が土で山をつくったり、シャベルで穴を掘ったりしていると、次第に興味が魅かれてくる様子がよくわかる。きっかけをつかむと、後はもう大

変。小さな手でシャベルをしっかりと握りしめ、穴を掘り始める。小さな穴、小さな山、大きな穴、大きな山、様々にできると、今度は「ねえ、水入れようよ。」ということになる。「ほく、もってくる、」のかけ声とともに、大なべ一杯の水を、あたりにまき散らしながら、よいしょ、よいしょと運んでくる。次から次へと注がれる、水。はねるのをよけながら、

「かわだ。うみだ。」

もう、大はしゃぎ。ベタベタ。ドロドロ。カーニバルの始まりだ。「もっと、もっと。」の声に、水の穴からあふれ出し、あたり一面水びたし。ついに水道栓は解放され、ひとかかえ程もある「おけ」からは、水があふれ出す。大人たちのつくった「山」にも水がかけられ、その「土砂くずれ」に、また子どもたちの歓声があがる。くつのまま水の中に入っていくものだから、最初はニコニコと笑顔で見守っていたおかあさんの顔も、だんだんひきつってくる。顔を見合わせて、ため息をもらすおかあさん。幼稚園に通うようになったら、洗たくが大変でし



ようね……。

そんなおかあさんたちにおかまいなく、子どもたちは、どろ水の中に座わりこんで平気、実に満足気である。どろ水のついた手で顔をぬぐうものだから、顔はまっ黒。すてきな白いブラウスは、どろ水をすって黒々とし、あわててまくり上げられるし、かわいいスカートはどっぷりと重くなつてたれ下がる。子どもがどろと遊んでいるのか、どろが子どもと遊んでいるのかわからなくなる。そして、最後のしめくり……「古タイヤ」をもち出して、どろ水の中に放り込む。パシャーンと音をたてて飛びこむ「古タイヤ」。拍手と歓声がわきおこる。その下で飛んだりはねたりの子どもたち……その度、タイヤの下のどろ水も、いっしょになって飛びはねる。

春の陽ざしに包まれて、子どももどろ水もきらきらと輝いて見える。

六月。雨の季節。シトシトと降り続く雨に、大人たちは「また、あめ……。」と嘆息する。そんな時、ふと見ると、雨の中にかさが広がっている。赤、黄、桃、色とり

どりのかさが五本、六本と集まって、まるで一つの花のよう……そこから「赤ちゃん、ね。」と小さな声が聞こえてくる。雨の日おままごと。こんな日はお客さんも少なくて、

「ごめんなさい。」

と声をかけると、半分びっくりしたような顔をして、

「いらっしゃいませ。」

一人ふえるたび、かさは一本ずつふえていき、おうちは少しずつ大きくなっていく。

四季折々、子どもたちと水は切りはなせそうもない。

子どもが水を求め、水も子どもと遊びたがっているのだから……。